JFC ネットワーク・スタディツアー2012

2012年8月3日(金)~10日(金)まで7泊8日でスタディツアーを開催しました。

◆スケジュール◆

- ○8月3日(金) PM マニラ着。マリガヤハウス訪問&オリエンテーション
- ○8月4日(土) AM 国籍確認訴訟原告団との交流会 at エコパーク

PM JFC の子どもたちとのワークショップ

○8月5日(日) AM バティス訪問&バティスヨギ(Batis Yohgi) との交流会 バティスのお母さんたちの手作りランチ

PM マニラ観光

○8月6日(月) AM ストリートチルドレンの施設 Bahay Tuluyan 訪問 ※スモーキーマウンテン訪問はキャンセル。

PM Bahay Tuluyan のイールドワーク

○8月7日(火)AM 国内線でダバオへ移動。RGS-COW(※)訪問。オリエンテーション JFC 母子家庭への家庭訪問

PM ホームステイ先へ移動、ホームステイ

- **○8月8日 (水) AM&PM** ワークショップ
 - ソリダリティナイト(お別れ会)

○8月9日(木) AM ミンダナオ国際大学訪問 PM 国内線でマニラへ移動

○8月10日(金) 日本〜帰国

(*X) RGS-COW: Religious of the Good Shepherd - Center for Overseas

JFC ネットワークでは、2007 年度からミンダナオ島ダバオ市にある NGO、RGS-COW で相談を受け付けたケースも扱っています。 COW はフィリピン人移住労働者の帰国サポートや安易な海外就労に対する啓発活動、人身売買防止活動などを行う団体です。

♪参加者たちからの感想をご紹介します♪

- ■最も印象に残っているプログラム&その理由
- ★感想

■原告団とのワークショップ

(理由) マリガヤハウスで行なっているワークショップを見るのは始めてだったので、マリガヤハウスのJFC 母子に対し、どのように国籍確認訴訟の意識を高めているか、わかりました。①国籍確認訴訟は原告団だけの問題ではなく、マリガヤハウスに係るJFC 母子みんなが応援するということ、また、②勝訴すれば原告団だけではなく、将来のJFC にも裨益する、ということを強調している点が印象的でした。また、原告団や奨学生の子どもたちとも交流でき、彼らから意見を



マリガヤハウスのワークショップにて

聞けたことも貴重な経験でした。同時に、原告団がモチベーションを保つための難しさを感じました。今回のワークショップに参加しない(出来ない)原告も多く、生活の維持や思春期の親子関係の問題のため、国籍確認訴訟が二の次になっている現状を知りました。また、訴訟は日本で行なわれているため、フィリピンでは実感が薄くなっていることも背景にあると思います。今回、スタディーツアーで訪れたことで、日本でもたくさんの支援者がいることを原告団が感じ、モチベーションの維持に少しでもつながることを願っています。

★バティスではバティスの活動内容のみならず、フィリピンの社会問題について様々な視点から学ぶことが出来ました。政府による家族計画が進まないことや、出稼ぎ労働の多さ、コールセンターなど一部の産業の発展による歪んだ経済成長など、様々な社会問題が、JFC 問題ともリンクしていることを再認識しました。また、昨今、JFC に係る日本への就労問題(JFC とその母親を狙い、ブローカーが日本への就労を違法に斡旋する問題)があり、違法であるゆえに、支援の手が届きにくいという現状も学ぶことができました。Bahay Tuluyan では、資金力をもつフィリピン現地 NGO の活動を知ることが出来たので、良かったです。ツアーの参加メンバーは個性的で、皆さんと一緒に行動できて楽しかったです。尚子さんは常に素晴らしいムードメーカーで、参加者に気を配り、また、参加者からの質問に一つ一つ丁寧に答えてくれました。今回のスタディ・ツアーを通して、大学時代に自分が関心をもってきたこと、関わってきたことを再認識することができました。また新たな気づきや学びもあり、貴重な経験でした。企画していただいた東京事務所やマリガヤハウスの皆さまには、本当に感謝しています。ありがとうございました。

■家庭訪問

(理由)二つの家庭に行き、ほかの家族の状況も含めて様子を聞くことができたのでよかった。 ホームステイよりも時間は短かったけど、コーディネーターの方がついていたことで、すぐに 打ち解けて話をしてもらうことができました。

★私はすでに一年フィリピンに住んでいますが、このツアーに参加して初めて知ることがたく さんありました。かいつまんで書くと、以下のようなことです。

・バティス

日本人から見れば、日本で働いている JFC が大変な暮らしをしているものの、「フィリピンの

生活状況と日本の状況をくらべて、まだ 日本の方がいい」という考えをもってい ることを聞き、とてもリアルな声だと思 いました。

• COW

現在シングルマザーのお母さんたちは、 子どもの日本国籍を取りたい、自分も日本で働きたいということを、そろって言っていました。でも、話を聞いていて、彼女たちの望むようなかたちでは、日本で暮らし働くことはできないだろうなと思う点がいくつもありました。こうした意識のギャップを埋めていくことは、と



ても大変な作業だと思います。

・ミンダナオ国際大学

オリエンテーションのなかで、日本で働くことを希望して、大学で介護を専攻する学生がフィリピンでは増えているものの、通常の大学のカリキュラムのなかでは、実習を経験することがなく、日本で働き出してから、こんなはずではなかったと気づくケースが多い、ということを聞きました。

ツアー参加者の方たちは、みんなそれぞれの立場で勉強、活動をしている方ばかりで話を聞いていて、とても勉強になりましたし、終始楽しく過ごせました。事情が許せば、ぜひまた参加したいツアーです。 (野口和恵さん/マニラ途中・ダバオコース参加)

■ダバオでのホームステイ

(理由)クライアントのお母さんから多くの話を直接聞くことができ、実際の生活も体験できた ため

★スタディー・ツアーでは、多くの場所に訪問し、それぞれの活動を聞いたことにより、よりフィリピンや JFC に対する理解が深まったと思います。他の団体のスタディー・ツアーでは、日本人が団体でどこかに訪問するという形が多いと思いますが、JFC ネットワークのスタディーツアーでは、クライアントさんや訪問先のスタッフの方と直接お話しできる機会が多いことが、魅力に感じました。スタディーツアーの参加者のメンバーもとても多様で、参加者の方からいろいろなお話を聞けたことも、いい経験になりました。

(大場しなのさん/ダバオコース参加)

■ダバオでのホームステイ

(理由) 当事者の家庭にお邪魔をすることで、直接様々なお話を聞くことのできた貴重な機会でした。また、普通のスタディツアーではなかなか知ることができないフィリピンの生活を体験させてもらうことができ、とても印象に残る一日となりました。こうしたフィリピンの普段の生活について文化を知り、当事者と直接交流を持つことでJFC 問題をより深く考えるきっかけにもなると思いました。

★私は他の方よりも短い期間の参加でしたがとても内容の濃いプログラムで、JFC 問題の現実

を思い知ることができました。音信不通になった父親を探し出し、コンタクトを再び取るということは困難が多く、なかなかケースが進まない現実を知りました。家庭訪問やホームステイでは当事者であるお母さんから生の声で父親や日本に対する強い思いを聞いたことが印象に残っています。お母さんから日本にいたときの写真を見せてもらいながら日本にいたときの思い出を楽しそうに語ってもらったときには切ない気持ちになるとともに、音信不通の父親に対し憤りを感じました。また、



COWにて

私が出会ったJFC達は自分の力でお店を開いたり、日本語を勉強していたりとより良い生活を送るため、健気に努力をしていました。彼らの思いが報われて欲しいと思います。そのため少しでも状況を改善し、JFC 母子の力になれるよう微力ながら今後も日本での活動に取り組もうと思いました。 (渡邊育美さん/ダバオコース参加)

■Bahay Tuluyan とコミュニティ訪問

(理由) Bahay Tuluyan が所有するオフィスビルの大きさが印象的だった。活動内容の説明を聞いて、日本では子どもが家庭から放り出されないように児相などが活動していることを思いだし、社会制度の違いを知った。コミュニティ訪問ではスクウォッターエリアの1軒を訪れ、狭い家の中を見せてもらったことが印象

★今回、マニラでは体験よりも話を聞くことの方が多く (Batis、Bahay Tuluyan)、それはそれでとても興味深かった。体験や交流も楽しいが、その場限りで終わってしまう印象がある。現地でしか聞けない話を聞くのも印象に残りよいと思う。ダバオでは相変わらず歓迎してくれて、参加者はみな楽しむことができたと思う。 (近藤博徳さん/全コース参加)

■ホームステイ (8/7)

(理由) 現場の生活を共にすることで日本がどれだけ裕福か、また JFC をもつ親が必死になって日本のお父さんを探すのかが理解できた。JFC が通っている学校に入らせてもらいました。何十人の生徒に対し、教員 1.2 人という教員の数が不足であり教育が行き届かないのではないかと感じた。学校の用具はどれも日本では処分してしまうくらい使い込んだものが多かった。子供たちの教育について考えさせられた。

★メインのJFC の人権問題だけでなく、フィリピンの教育、健康について興味がわいた。教育では、もっときめ細かな教育を受けることができないか、1 人で生きていく力をつけてほしいと思いました。また健康については、フィリピンの死因は肥満が原因のものばかりで、食生活の見直しや運動を取り入れるとば良いが、文化や経済状況が違うと難しいからすぐに変えることはできない。しかし、健康でいられることで医療代減少、健康でまず突然死などは減少すると考えられる。

●印象に残っていること

JFC のお母様がおっしゃった言葉。「娘には日本人と結婚してほしい。自分の想像している日本じゃなくても、こんなに貧富の差があって苦しい生活をずっと送ってほしくない。」

とても心に深く、印象に残った言葉。 (柴田景子さん/全コース参加)

■ダバオでの家庭訪問および民泊
■(理由)在住フィリピン人女性の出身地を聞くと、地方出身者が大半であることから、地方での生活を知ることができたことで彼女



ミンダナオ国際大学

たちの現状が少しでも理解できたこと。そしてフィリピン家族の日本への期待度の大きさを実感できたこと、そして JFC への過度の期待がフィリピンの家族にあること、思春期の子どもにとって日本行きの選択に対して複雑な思いに揺れているのを垣間見ることができた。

2. ツアーが終わって、1週間以上たつ。非日常から日常に戻った日々の中で、今回の旅を考えている。日頃は在住のフィリピン女性との共感、理解したい、彼女たちの日本とフィリピンという 2 つの家族を持つことはどういう意味を持つのだろうかと考える日々であるが、今回の旅は子どもたちについて考える旅となった。

マニラはあまりのも巨大で、果てしない深い闇と欲望を抱えた都市であった。その闇は5年前に訪れた時よりも混迷しているように感じた。マリガヤハウスの子どもたち、ダバオで民泊させていただいた家族の少年、少女は日本に行きたいと切望する。日本人の血を引いていること、そこに希望を見出している。そして、家族もそれに期待をかけている。だが、バハイトルヤンのコミュニティで出会った16歳の少女は1週間に1度、バハイトルヤンにジュニア・エデウケーター(栄養関係)として通うだけで、テレビを見るのが楽しいという。仕事をしたいというがそれもない。彼女はこれから、どうやって生きていくのだろうか。

今回、フィリピン社会の様々な面に触れる旅ができたこと、河野直子さんのJFCへの深い思いや情熱、そして私たちへのきめ細かな配慮のあるおもてなしの心に深く感謝している。この旅に参加して良かったと、そして、とても満足した旅として私の心に残るだろう。ただ、最後にダバオでの家庭訪問のケース、や民泊した家のケースなど、若い皆さんと討議できる時間が持てなかったことが残念であった。ツアーを計画して下さった皆様、ありがとうございました。 (川野紀子さん/全コース参加)

国籍確認訴訟ニュース

◆次回期日は10月30日午後2時~東京地方裁判所808号法廷となりました♪

去る7月17日、国籍確認訴訟・控訴審の第1回期日がありました。 私たちからは事前に控訴理由書を提出しており、その陳述手続が行われました。次回は、国側からの反論が提出される予定ですが、準備に時間を要するとのことで、反論書面の提出期限が10月5日となりました。30日は当事者の意見陳述ができるよう、裁判所と調整をしたいと思います。

- ❤皆さんの傍聴をよろしくお願いします。❤
- ●署名第3回締め切り 2012年9月30日
- ★オンライン署名も可能です。JFC ネットワークのホームページ (http://www.jfcnet.org/)からもアクセスできます。

http://www.shomei.tv/project-1940.html

★署名用紙は日本語、英語、タガログ語があります。JFC ネットワークのホームページからもダウンロードが可能です。 ご利用ください。

